



北京 改革開放が生み出す景観

藤永 豪 (COE研究員・PD)

昨年の冬、海外派遣により、私は北京師範大学民俗学与文化人類学研究所を訪ねる機会に恵まれた。約2週間にわたって、北京市中心部と郊外の農山村をまわり、その景観を観察した。

今、中国は著しい経済発展を遂げている。改革開放政策のもと、沿岸地域と内陸地域の経済格差が顕著化しながらも、北京や上海などの大都市やその近郊の農山村では、住民の生活水準が一気に向上し、地域の景観も大きく変貌している。

写真1は北京の繁華街の一つ西城区西単である。カラフルな広告ときらめくネオン、若者で込み合う雑踏。今の北京の急成長ぶりが窺える。写真2は西城区徳勝門付近における再開発の様子である。近代的な高架道の向こうにマンションが見える。その間は空き地となっている。かつては四合院が集まり、古い町並みを残していた。路地では子どもたちが遊び彼らの笑い声が響く中、母親たちが世間話に夢中になっている、そんな風景が見られたはずである。今は取り壊しを待つ古ぼけた民家が数軒残るだけである。スクラップアンドビルドによる大規模な破壊と創造、その景観を目の前にした時、白黒のフィルムの中でしか見たことがなかった、かつての日本の高度経済成長を、カラー映像で見ているような奇妙な心持ちになった。現地での案内役を引き受けてくださった方の1人が「生活は良くなったけど、北京らしさが、老(ラオ)北京がどんどん消えてしまっていくようで淋しい。」と漏らされたことを思い出す。伝統と現代、この2つがせめぎあう現場とジレンマを北京の景観の中に見た気がする。

ただし、一方では、そんなノスタルジックな感傷を吹き飛ばすような景観も存在した。そこは北京市中心部から南西へ約40kmのところにある韓村河鎮である。中心部には鉄筋コンクリート製の2階建ての住宅が建ち並び、その脇にはこれまた洒落たマンションが林立している(写真3)戸建ての住宅群は村が建設した村民専用のもので、日本のように外部資本が販売目的に造成したものではない。逆に隣接するマンションは都市部の労働者や引退者向けに販売されている。開発主体はやはり韓村河鎮である。

また、広大な公園も造られ、その中にはスワンボートが浮かぶ人工池があり、数本の橋が架かっている。何故か実物の戦車や飛行機までもが置かれていたりする。「これが農村なのか!？」、驚いていたのは私だけでなく、同行していただいた2人のチューターも、目を見張っていた。ごくありふれた農村だった韓村河は(写真4)、建築関連の郷鎮企業を立ち上げ、近年の都市開発の波に乗り急成長を遂げた。その後、不動産事業にまで手を広げ、マンション販売をも始めたわけである。現在ではほとんどの住民が農外就業者である。韓村河は最も成功した農村として注目を浴び、江沢民元総書記が視察に訪れたほどである。未だ貧困に喘ぐ内陸の農村とは対照的な、極端な例かもしれない。しかし、「改革開放」、「社会主義自由経済」など、中国独自の政治路線が生み出した韓村河の景観を見た時、私は初めて現在の中国を肌で感じた気がした。それは予想もしなかった村の景観を見たからかもしれないが、このとてつもない変化が中国の今の実情を明確に示しているのは間違いない。

この他にも、明・清代の街並みを保存し、観光開発に成功した村や廃村・移転が決定・実行された村など、北京の景観は、私にその多様な表情を見せてくれた。今回の海外派遣を機に、中国研究に本腰を入れて取り組んでいきたいと思う。



西城区西単のデパート



西城区徳勝門からみた再開発の様子



房山区韓村河の景観



開発前の韓村河の景観
(韓村河鎮資料を接写)